

21世紀に求められる資質・能力に関する児童生徒の意識調査結果

研究主題にある「21世紀型能力」とは、すべての教科等に共通する「汎用的能力」として、国立教育政策研究所が教育課程編成に関する基礎的研究報告書において示したものである。

ここにおいて示された資質・能力の姿（右表）をもとに、以下の項目でアンケート調査（4件法）を行った。

調査は、教科型研究協力校として委嘱した山鹿小学校（5・6年生）、山鹿中学校、鹿本高校の児童生徒に対して、平成27年7月中旬に行った。

国立教育政策研究所が整理した資質・能力の構造化のイメージ

求められる力	具体像（イメージ）
未来を創る（実践力）	生活や社会、環境の中に問題を見だし、多様な他者と関係を築きながら答えを導き、自分の人生と社会を切り開いて、健やかで豊かな未来を創る力
深く考える（思考力）	一人一人が自分の考えを持って他者と対話し、考えを比較吟味して統合し、よりよい答えや知識を創り出す力、さらに次の問いを見つけ、学び続ける力
道具や身体を使う（基礎力）	言語や数量、情報などの記号や自らの身体を用いて、世界を理解し、表現する力

21世紀に求められる資質・能力

未来を創る（実践力）

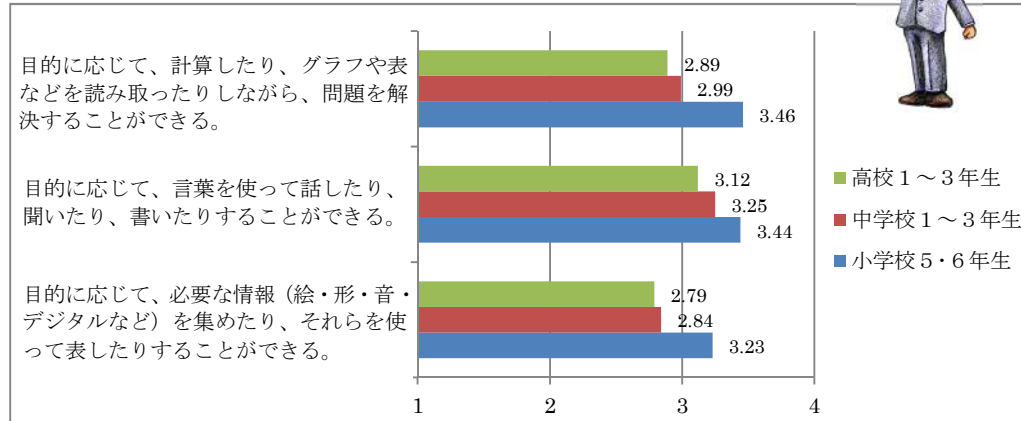
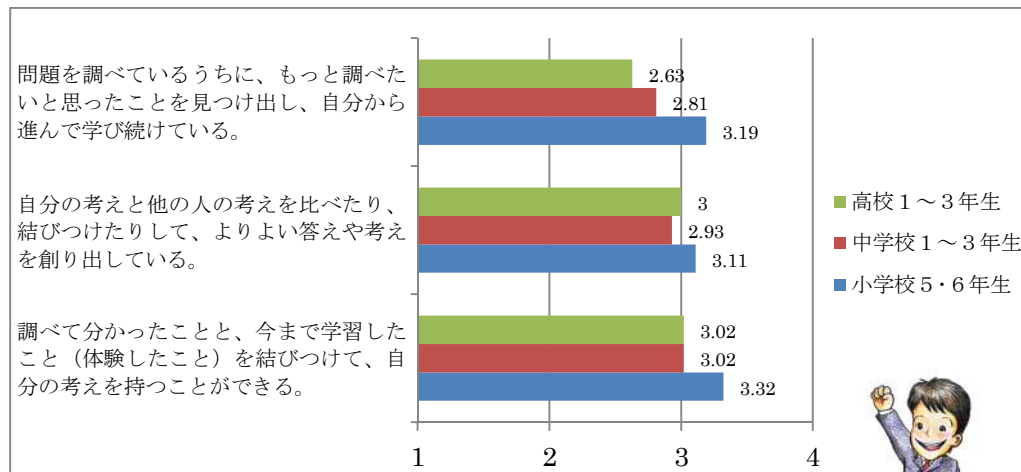
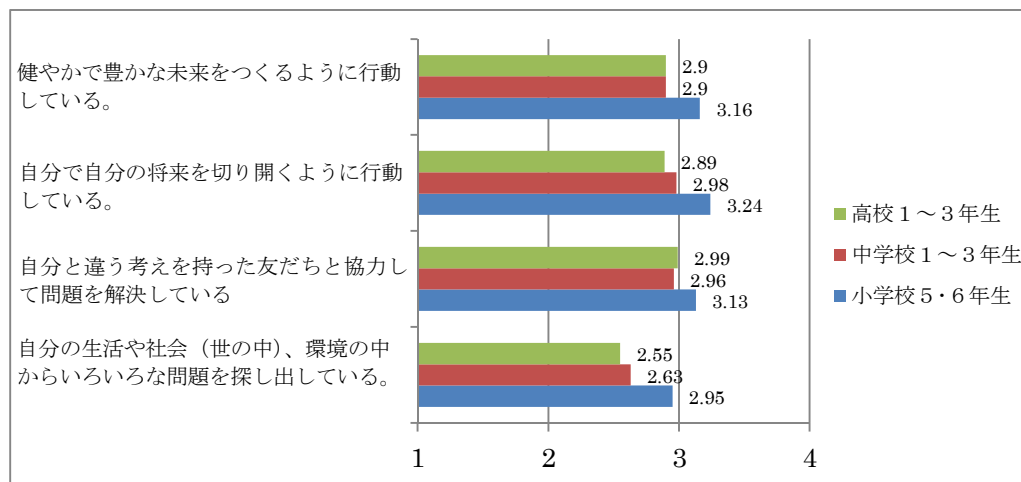
- ・自律的活動
- ・関係形成
- ・持続可能な社会づくり

深く考える（思考力）

- ・問題解決・発見
- ・論理的・批判的思考
- ・創造的思考
- ・メンタリング
- ・学び方の学び

道具や身体を使う（基礎力）

- ・言語
- ・数量
- ・情報



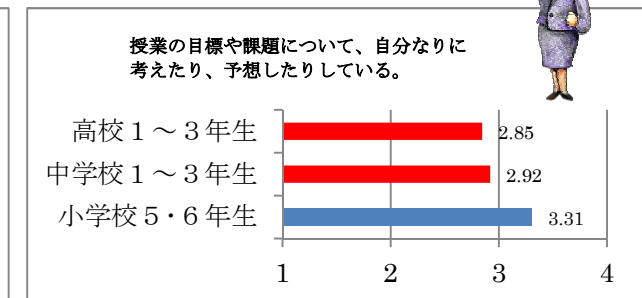
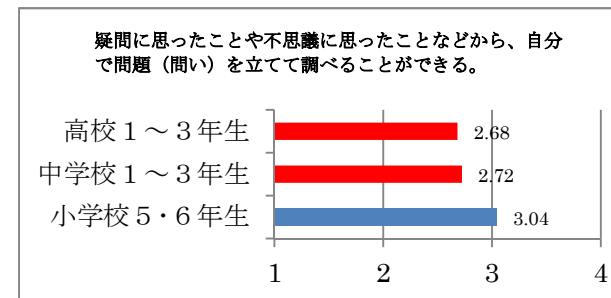
全体的な傾向として、小学5・6年生は意識が高く、中学校・高等学校と学年が上がるにつれて意識が低くなっている結果となった。このことは、中学校・高等学校段階において、自分の姿をより客観的に捉えることができるようになる発達段階を考えると、それに伴って段階的に自らの学びを振り返る「自律的活動」の必要性を証明しているともいえる。

また、各要素を比べてみると、全体的に低い傾向にあるのが思考力である。問題解決的な学習を展開することによって、更に、思考力を中核とした授業の展開の工夫が必要である。

問題解決的な学習過程の場面に見られる能力に対する意識の実態

問題解決的な学習の過程に照らし合わせた能力の実態

つかむ
見通す
さぐる・深める
まとめる

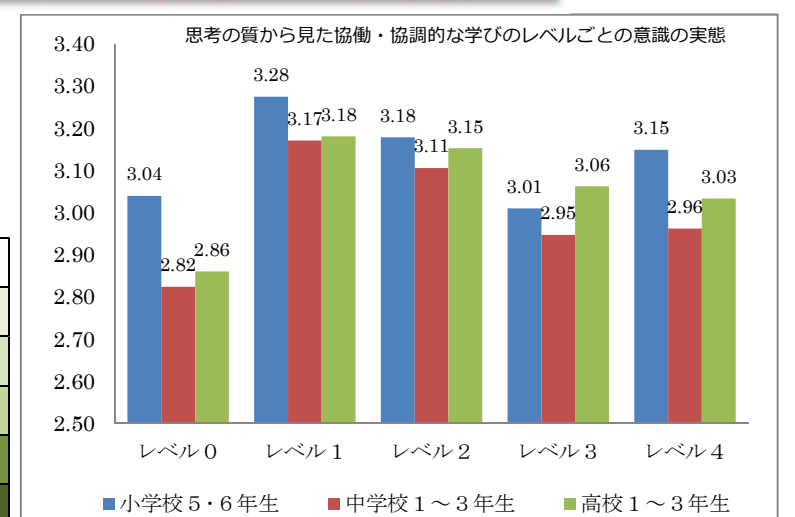


問題解決的な学習（課題解決学習）過程の各場面における児童生徒の能力に対する意識の実態は、上記の結果となった。各項目を比べて見ると、問題発見力や論理的思考力が他の項目よりも低く、まとめる力（分類・整理）といった思考力に課題があることが分かる。特に、協働・協調的な学びの場面における「分かりやすく伝える」ことや「友だちとの教え合いや学び合い」に対する意識が、他の項目よりも低いことが分かった。相手意識や目的意識を明確に持ち、多様な価値観を持った他者と協働して学び合う活動を意図的・計画的に組み込む必要がある。

協働・協調的な学びにおける思考の質から見た児童生徒の実態

昨年度の研究で提案した思考の質から見た協働・協調的な学び（いわゆる「学び合い」）をレベル化すると、自己の考えの深まりを見ることができる。そこで、レベル別に期待する生徒の姿を示し、その意識の実態を把握した。

活動	思考の質	期待される姿
協働・協調的な学び	レベル0	出し合う（正誤入り交じり）
	レベル1	伝え合う（誤→正）
	レベル2	伝え合う（正→複数の解法・考え）
	レベル3	伝え合う（自分の考え→再構築）
	レベル4	伝え合う（新たな価値を付加された考え）



レベル0は、学び合う姿と言うよりも、一方通行的に自分の考えを相手に伝える意味合いが強いため、あまり学習活動として行われていないことが分かる。よって、共同解決の場面でよく見られてきた、教え合いによる正誤の判断や複数の考えに触れるといったレベルの学習活動に対しては、高い意識で捉えていることが分かった。反面、自分の考えを友達の考えをもとに、再構築することに対しては、意識が低いことが分かった。これは、協働的な学びにおける練り上げ方がうまくいかないという授業者の悩みともつながっていると考えられる。

これらの結果からも分かるように、協働・協調的な学びを充実するためには、学びのレベルを明確にしたねらいを持って協働的に学び合わせる必要があり、児童生徒とそのねらいを共有することが必要である。